矢作川研究№10:75～84,2006

矢作川河口域における絶滅のおそれのある貝類

Threatened marine and brackish shells of the estuary of the Yahagi River

川瀬　基弘

Motohiro Kawase

はじめに

10年ほど前から日本全国，あるいは都道県毎にレッドデータブック（絶滅のおそれのある野生生物に関する資料集）が出版されており（水産庁・日本水産資源保護協会，1994；日本水産資源保護協会，1995，1996，1997，1998；和田ほか，1996；水産庁，1998など），現在作成中の地域も数多くある．これらの中には浅海域の生物も数多く記録されている．矢作川河口域の底生生物についての調査報告（川瀬，2002a）を行った後に，愛知県のレッドデータブック（愛知県環境部自然環境課，2002）が刊行された．その後，愛知県では名古屋市のレッドデータブック（名古屋市動植物実態調査検討会，2004a，2004b）も刊行されており，これらの中にも多数の海域生物が掲載されている．本報告は，それらのレッドデータブックを基に，矢作川河口干潟における底生生物の中で絶滅のおそれのある貝類をまとめたものであり，最近の５年間の現地調査の結果を加えて報告する．

種の選定と生息状況

リストアップした種の選定方法については以下の通りである．愛知県のレッドデータブック（愛知県環境部自然環境課，2002）から，矢作川河口域の干潟や潮間帯で生息が確認されている種，または過去に生息が確認されていた種(現在では矢作川河口域から絶滅した種を含む)を抜粋した．これに加え，川瀬（2002a）で報告された種，及び2001～2005年の現地調査で確認された種の中から，日本各地あるいは特定地域で減少傾向にある種を抽出した．現地調査は，碧南市川口町の矢作川河口右岸の砂泥干潟周辺（川瀬（2002a）の図１地点）であり，それより上流域は調査対象域に含めなかった．また，主としてヨシ原湿地と潮下帯に生息するものは除外し，腹足類11種，斧足類14種，合計25種の貝類を選定した．これらの25種の矢作川河口域での生息状況，愛知県での生息状況，および県外での主要な情報を以下に記録する．本文中で使用する学名は，肥後・後藤（1993）に従った．

イボキサゴ（図1－1）
Umbonium (*Suchium*) *moniliferum* (Lamarck)
ニシキウズ科 TROCHIDAE

矢作川河口域を含めて愛知県ではイボキサゴの死殻が確認されているが，近年生貝の採集記録はなく，県の評価区分は絶滅危惧ⅠA類である（原田・木村，2002）．愛知県科学教育センター（1967）によれば，イボキサゴは矢作川河口域などでも普通に見られたが，本調査ではわずかな死殻が確認されただけであり，死殻はサンドポンプで投入された殻（川瀬，2004）である可能性が含まれている．

木村（2004）によれば，名古屋市内では，港区藤前干潟で古い死殻が確認されたに過ぎず，名古屋市の評価区分は絶滅危惧ⅠA類．

東北地方以南から九州にかけて，かつて内湾ならばどこにでも見られた種だが，東京湾や熊本県天草富岡などでは絶滅したことが報告され，日本各地で絶滅に向けて進行している種とされている（福田，1996）．相模湾でも消滅し（池田ほか，2001），千葉県では重要保護動物に指定されている（黒住，2000）．熊本県希少野生動植物検討委員会（1998）によれば，本種は熊本県内の内湾的な砂泥干潟にかつては至る所で見られたが，激減して数カ所で小さな個体群が残っているだけで絶滅危惧種に評価されている．

ヒロクチカノコ（図1－2）
Neritina (*Dostia*) *violacea* (Gmelin)
アマオブネ科 NERITIDAE

愛知県では庄内川，矢作川河口域でヒロクチカノコガイの大きな個体群が残っている（原田・木村，2002）が，

矢作川河口域の本調査域内のカキ礁では生貝を確認することが出来なかった（川瀬，2002a）．また，2005 年の本調査域のカキ礁からは本種を発見することが出来なかった．愛知県の評価区分は絶滅危惧Ⅱ類である（原田・木村，2002）．本調査対象外であるやや上流からは，本種の生息が報告されている（木村・木村，1999）．

木村（2004）によれば，名古屋市港区藤前干潟の干潟上部の転石地，庄内川下流から河口域にかけてのアシ原湿地内に健全な個体群が分布しているが生息範囲は狭いとされている．名古屋市の評価区分は絶滅危惧Ⅱ類．また，実際に 2003～05 年に藤前干潟を調査したところ，カキ礁や転石周辺に本種の生息を多数認めることができた．

増田（1996，1998）によれば，本種は生息河川ではまとまった個体数を確認できるが，環境悪化で個体群が極めて縮小している場合，確認数が数個体程度で若年貝の存在が認められない産地もあり，希少種に評価区分されている．千葉県では近年の報告・調査では確認されておらず,消息不明・絶滅生物に評価区分されている(黒住,2000)．

イシマキガイ（図 1－ 3）
Clithon retropictus (v.Martens)
アマオブネ科 NERITIDAE

本種は水質汚染や河川構造の改変などに敏感に反応するため，環境保全の指標種として重要と考えられている．また，全国的に減少傾向にあり，環境の改変が進行すれば絶滅する可能性は高い（西脇，1996）．相模湾では絶滅寸前（池田ほか，2001）．千葉県では最重要保護生物に指定されている（黒住，2000）．

愛知県や名古屋市のレッドデータに本種の記載はなく，本調査地域における矢作川河口干潟では，カキ礁や転石に付着している個体が時々見つかるが個体数は少ない．

タケノコカワニナ（図 1－ 4）
Stenomelania loebbeckei (Brot)
トウガタカワニナ科 THIARIDAE

愛知県では既に絶滅したとされている（原田・木村，2002）．福田（1996）は愛知県矢作川河口を現存する本種生貝産地の一つにあげている．しかし 2000～05 年の本調査では死殻すら確認していないので県の評価同様に矢作川河口域では絶滅したと考えられる．例えば，豊川下流域でかつて本種の記録があったが（愛知県科学教育センター，1967），松岡ほか（1999）の報告では生貝は確認されていない．

カニモリガイ（図 1－ 5）
Rhinoclavis (*Proclava*) *kochi* (Philippi)
オニノツノガイ科 CERITHIIDAE

主に内湾潮下帯の砂泥地に生息し，矢作川河口域の干潟からは死殻だけの発見記録があり（原田・木村，2002），全国的にみても絶滅寸前の可能性が高い（福田，1996）．愛知県の評価区分は絶滅危惧ⅠA 類である．40 年ほど前には愛知県でも生息の記録があるものの（愛知県科学教育センター，1967），原田・木村（2002）によれば，2001 年に知多半島内海沖水深 15m から生貝発見の報告があるが，これを除けば愛知県内の干潟を含む潮間帯および潮下帯からの記録は死殻のみである．本調査域においても生貝を確認することはできなかった．

相模湾では消滅寸前である（池田ほか，2001）．

フトヘナタリ（図 1－ 6）
Cerithidea rhizophorarum A.Adams
ウミニナ科 POTAMIDIDAE

愛知県内では一部の地域で大きな個体群が残っているものの，生息場所は著しく減少している（原田・木村，2002）．愛知県の評価区分は準絶滅危惧種である．

木村（2004）によれば，名古屋市内では，港区藤前干潟と庄内川河口のヨシ原湿地内で少数の死殻が確認されたに過ぎず，近年生息は確認されていない．名古屋市の評価区分は絶滅危惧ⅠA 類．

汐川干潟では潮間帯上部のヨシ原の中に多く分布する（藤岡・木村，2000）が，矢作川河口域域において生貝は稀にしか認められていない（川瀬，2002a）．今回の調査でも生貝は非常に少なかった．また，木村・木村（1999）によれば，本種は前浜干潟の後背湿地のヨシ群落内で個体数が多く，それ以外では個体数が激減する．

瀬戸内海や琉球列島では多産するが，他の海域では激減し（福田，1996），相模湾では消滅した（池田，1994；池田ほか，2001）．風呂田（2000）は，東京湾とその周辺において，４箇所の消滅及び消滅寸前地域を報告した．千葉県では，絶滅寸前のため最重要保護生物に指定されている（黒住，2000）．

ヘナタリ（図 1－ 7）
Cerithideopsilla cingulata (Gmelin)
ウミニナ科 POTAMIDIDAE

愛知県ではヘナタリの生息地，生息数ともに著しく減

少したと考えられており，矢作川河口域では生貝が確認されている（原田・木村，2002）．愛知県の評価区分は準絶滅危惧種である．2001 年の調査では矢作川河口域で本種を確認することが出来なかったが（川瀬，2002a），2005 年の調査で，大量に群生するウミニナに時々混在している生貝を確認した．

木村（2004）によれば，名古屋市内では，港区藤前干潟で打ち上げられた古い死殻が少数採集されるに過ぎず，生息が確認できなく絶滅した可能性も高い．名古屋市の評価区分は絶滅危惧ⅠA 類．

本種は三河湾以西では現在も多産地が少なくないが全国的には絶滅に向かっており，東京湾では絶滅寸前，三浦半島や相模湾では絶滅している（池田，1994；福田，1996；池田ほか，2001）．千葉県では数年後に絶滅する可能性が高く最重要保護生物に指定されている（黒住，2000）．沖縄県文化環境部自然保護課（2005）によれば，沖縄県では準絶滅危惧に評価されている．

カワアイ（図 1－ 8）

Cerithideopsilla djadjariensis (K.Martin)

ウミニナ科 POTAMIDIDAE

愛知県での生息場所は最近５年間ほどで激減し，生貝の記録は汐川干潟のみであり県の評価区分は絶滅危惧ⅠB 類である（原田・木村，2002）．木村・木村（1999）の報告では，矢作川河口域や汐川干潟でも生貝が確認されているが，原田・木村（2002）や藤岡・木村（2000）の報告では矢作川河口域や汐川干潟からは生貝は発見されていない．今回の調査においても，本種の生息を認めることはできなかった．

木村（2004）によれば，名古屋市内では，港区藤前干潟で打ち上げられた古い死殻が少数採集されるに過ぎず，生息が確認できなく絶滅した可能性も高い．名古屋市の評価区分は絶滅危惧ⅠA 類．

全国的に絶滅に向かっており（福田，1996），相模湾では消滅（池田，1994；池田ほか，2001），千葉県ではヘナタリと同様に数年後に絶滅する可能性が高く最重要保護生物に指定されている（黒住，2000）．沖縄県文化環境部自然保護課（2005）によれば，沖縄県では準絶滅危惧に評価されている．

ウミニナ（図 1－ 9）

Batillaria multiformis (Lischke)

ウミニナ科 POTAMIDIDAE

愛知県の生息場所は著しく減少したと考えられ，矢作川河口域では死殻のみの報告となっており，愛知県の評価区分は準絶滅危惧である（原田・木村，2002）．しかしながら，川瀬（2002a）の調査報告では矢作川河口域潮間帯上部に群生しており，2005 年には干潟一面に本種が群生しているのを確認した．汐川干潟では潮間帯上部に特に多いとされている（藤岡・木村，2000）．

木村（2004）によれば，名古屋市内では，港区藤前干潟で死殻がわずかに採集されるに過ぎず，近年生貝が全く採集されず，絶滅した可能性が高い．名古屋市の評価区分は絶滅危惧ⅠA 類．

全国的に危険（絶滅に向けて進行しているとみなされる）種とされ，干潟泥底の環境指標生物として有効と考えられている（福田，1996）．黒住（1998）は，内湾干潟のウミニナとホソウミニナでは前者のみが減少していることを指摘している．

全国的に減少傾向にあり，本種の絶滅は，生息していた環境の喪失，さらには干潟近郊の文化の崩壊を示す指標としての価値が大きいと考えられている（黒住，1995）．相模湾においては消滅寸前で，絶滅は時間の問題とされる（池田ほか，2001）．風呂田（2000）は，東京湾とその周辺において，７箇所の消滅及び消滅寸前の地域を報告した．千葉県では数年後に絶滅する可能性が高く，最重要保護生物に指定されている（黒住，2000）．

イボウミニナ（図 1－10）

Batillaria zonalis (Bruguiére)

ウミニナ科 POTAMIDIDAE

かつて本種は愛知県にも生息していたが（愛知県科学教育センター，1967），県内での生息場所は著しく減少し，現在生息が確認できるのは田原湾に位置する汐川干潟の 1 カ所だけであり，矢作川河口域の干潟からは死殻の発見記録がある（藤岡・木村，2000；原田・木村，2002）．本調査において矢作川河口域で本種を発見することはできなかった．愛知県の評価区分は絶滅危惧ⅠB 類．

木村（2004）によれば，名古屋市内では，港区藤前干潟で死殻が稀に採集されるに過ぎず，近年生貝が全く採集されず，絶滅した可能性が高い．名古屋市の評価区分は絶滅危惧ⅠA 類．

近年の内湾奥部の開発に伴ってイボウミニナは全国的

に激減し，日本本土では絶滅寸前である（福田，1996）．相模湾や千葉県では絶滅したとされている（池田ほか，2001；黒住，2000）．沖縄県文化環境部自然保護課（2005）によれば，沖縄県では準絶滅危惧に評価されている．

ムシロガイ（図 1－11）
Niotha livescens (Philippi)
オリイレヨフバイ科 NASSARIIDAE

本種は内湾からやや外洋にかけての干潟及び潮下帯砂泥底に生息し，矢作川河口域からは死殻の発見記録があるが生貝は採集されていない（原田・木村，2002）．かつては伊勢湾・三河湾に普通に生息していたと考えられるが（愛知県科学教育センター，1967），愛知県の評価区分は絶滅危惧ⅠA類である．

千葉県では個体数が少なく生息環境が限られており要保護生物に指定されている（黒住，2000）．

ハイガイ（図 1－12）
Tegillarca granosa (Linnaeus)
フネガイ科 ARCIDAE

愛知県の評価区分は絶滅であり，矢作川河口域では死殻の確認だけである（原田・木村，2002）．全国的に絶滅寸前であり，東京湾，瀬戸内海，有明海などの閉鎖性の高い内湾から記録があるが，有明海および瀬戸内海広島県海岸の一部以外では絶滅したとされている．さらに有明海でも減少していることが報告されている（加藤・福田，1996）．かつては衣浦湾，汐川干潟などの内湾奥に普通に生息していたと考えられているが（愛知県科学教育センター，1967），今回の調査では発見することが出来なかった．本調査域では古い死殻が発見されることがあるが，それらはすべてサンドポンプで投入された殻（川瀬，2004）であると考えられる．

木村（2004）によれば，名古屋市内では，港区藤前干潟で古い死殻が極めて稀に確認されるに過ぎず絶滅したとされている．名古屋市の評価区分は絶滅．

波部（1998）によれば，本種は日本の大きな内湾に僅かに生息している状態で，有明海で希少種，有明海以外の海域で危急種とされている．

バカガイ（図 1－13）
Mactra (*Mactra*) *chinensis* Philippi
バカガイ科 MACTRIDAE

オホーツク海・サハリン以南，北海道～九州までの日本全国，朝鮮，中国の潮間帯～水深 20m の砂泥底に分布し（肥後・後藤，1993），全国的に個体数も多いと考えられるが，本調査域では非常に少なく（川瀬，2002a），今回の調査でも生貝の発見は非常に少なかった．

愛知県（原田・木村，2002），名古屋市（木村，2004）及び加藤・福田（1996）では評価対象外であるが，熊本県では近年減少傾向にあり，干潟の開発・減少，浅海域の環境悪化が原因で，天草近海の潮間帯ではほとんど見られなくなり，潮下帯でも減少傾向が著しく絶滅危惧種に指定されている（熊本県希少野生動植物検討委員会，1998）．

クチバガイ（図 1－14）
Coecella chinensis Deshayes
チドリマスホウ科 MESODESMATIDAE

本種は，愛知県（原田・木村，2002）や名古屋市（木村，2004）では評価対象外であるが，本調査域ではわずかな生貝と新鮮な死殻を確認できただけである．

湾奥の泥干潟に多い貝であり，汚染にも比較的強いと考えられているが，埋め立てによる湾奥の環境そのものの減少にともなって，大都市周辺では減少している（加藤・福田，1996）．例えば相模湾では減少傾向にあり（池田ほか，2001），千葉県では銚子からの記録しか見つけられず最重要保護生物に指定されている（黒住，2000）．沖縄県文化環境部自然保護課（2005）によれば，沖縄県では準絶滅危惧に評価されている．

ユウシオガイ（図 1－15）
Moerella rutila (Dunker)
ニッコウガイ科 TELLINIDAE

愛知県内においては，ユウシオガイの生息場所である内湾奥部の砂泥干潟の環境が破壊されているので，本種の生息場所，生息数ともに減少したと考えられており（原田・木村，2002），矢作川河口域では死殻が確認されているに過ぎない．愛知県の評価区分は準絶滅危惧種である．川瀬（2002a）の調査報告でもユウシオガイは発見されていないが，2004 年の矢作川河口干潟調査では新鮮な死殻をいくつか発見し，2005 年の調査では少ないながらも生貝を発見することができた．

他に愛知県内では，汐川干潟（藤岡・木村，2000）や，

名古屋市港区藤前干潟（木村，2001）から報告がある．しかしながら，2003～05 年にかけて実際に藤前干潟の調査を行った結果ユウシオガイの生貝を確認することはできなかった．

加藤・福田（1996）によれば，本種はサクラガイ類の中でもっとも湾奥の干潟に生息する種であるが，内湾の埋め立てや汚染などにより各地で激減し東京湾，田辺湾，博多湾では絶滅している．相模湾では消滅し（池田，1994；池田ほか，2001），千葉県では複数の記録があるものの詳細な調査が行われれば絶滅とされる可能性が高いため最重要保護生物に指定されている（黒住，2000）．

サクラガイ（図 1－16）
Nitidotellina nitidula （Dunker）
ニッコウガイ科 TELLINIDAE

サクラガイの生息地である内湾潮間帯から内湾潮下帯の砂泥地の環境が破壊されているので，本種の生息場所，生息数とも減少したと考えられており，矢作川河口域では死殻の記録があるに過ぎない（原田・木村，2002）．愛知県の評価区分は準絶滅危惧種である．

例えば，愛知県科学教育センター（1967）の報告では本種はかつて三河湾で広く見られたが，最近では，木村（2000）や西條ほか（2004）に生貝の記録があるものの，愛知県内の大部分の地域は死殻の報告が圧倒的に多い（原田・木村，2002）．本調査においても生貝を確認することは出来なかったが，2005 年には新鮮な死殻を河口干潟において数個体認めることができた．

相模湾では減少傾向にある（池田ほか，2001）．

サビシラトリ（図 1－17）
Macoma (*Macoma*) *contabulata* (Deshayes)
ニッコウガイ科 TELLINIDAE

1995 年には矢作川河口域で比較的多くの個体の生息が確認されていたが，2001 年には死殻もまれになった（原田・木村，2002）．川瀬（2002a）の報告では，矢作川河口干潟で時々生貝が確認されている．愛知県の評価区分は絶滅危惧ⅠB 類である（原田・木村，2002）．汐川干潟からも報告されている（藤岡・木村，2000）．

木村（2004）によれば，名古屋市内では，港区藤前干潟に古い死殻が打ち上げられて採集されるが個体数は少ない．名古屋市の評価区分は絶滅危惧ⅠB 類．

2005 年に名古屋市港区の藤前干潟を数回にわたり調査したところ，泥底下 60～80㎝ 程度のやや深い場所に生息している個体を発見した．藤前干潟においてサビシラトリはやや深く潜り水管を泥底表面上に出していることがあるため，それにより何個体かを確認することができた．個体数は多くないが今回の藤前干潟での調査結果から，木村（2004）の調査報告に比べて藤前干潟の個体数は回復傾向にあると考えられる．

同様に矢作川河口域においても，生貝はやや深い泥底下に潜っている場合が多いが，個体数は少なく 2005 年の調査でも生貝の発見は稀であり死殻が時々見られる程度であった．

千葉県では 2 箇所のみ生息が確認され，重要保護生物に指定されている（黒住，2000）．相模湾では既に消滅している（池田ほか，2001）．

オチバガイ（図 1－18）
Psammotaea virescens （Deshayes）
シオサザナミ科 PSAMMOBIIDAE

2000～05 年の調査において矢作川河口域ではごく稀に死殻を発見した程度であるが，2001 年の調査では生貝を 2 個体採集している（川瀬，2002a）．全国的に危険（絶滅に向けて進行しているとみなされる）種とされ，伊勢湾では絶滅寸前である（加藤・福田，1996）．原田・木村（2002）によれば，愛知県側の伊勢湾や三河湾では近年生貝はおろか，死殻すら採集されておらず，愛知県の評価区分は絶滅危惧ⅠA 類である．

千葉県では消息不明・絶滅生物に指定されている（黒住，2000）．

イソシジミ（図 1－19）
Nuttallia japonica （Reeve）
シオサザナミ科 PSAMMOBIIDAE

愛知県（原田・木村，2002），名古屋市（木村，2004）及び加藤・福田（1996）では評価対象外であるが，本調査域での生息個体数はそれほど多くはない．今回の調査でも時々見られただけである．

藤岡・木村（2000）による汐川干潟の調査報告には本種の記録はない．2003～05 年にかけて実際に行った藤前干潟の調査では，ほんのわずかな生貝を確認したに過ぎない．

相模湾では消滅寸前であり（池田ほか，2001），千葉県では一部の地域で絶滅し，要保護生物に指定されている（黒住，2000）．

マテガイ（図 1－20）
Solen (*Solen*) *strictus* (Gould)
マテガイ科 SOLENIDAE

愛知県内において，本種はかつて多産したが（愛知県科学教育センター，1967），マテガイの生息場所である内湾砂質干潟の環境が破壊されているので，本種の生息場所，生息数ともに減少したと考えられており，矢作川河口域では死殻が確認されているだけに過ぎない（原田・木村，2002）．愛知県の評価区分は準絶滅危惧種である．川瀬（2002a）の調査報告でもマテガイは発見されていないが，2005 年の矢作川河口干潟調査では，20㎜ 程度の本種の幼貝を何個体も発見している．

ヤマトシジミ（図 1－21）
Corbicula (*Corbicula*) *japonica* Prime
シジミ科 CORBICULIDAE

愛知県（原田・木村，2002），名古屋市（木村，2004）及び加藤・福田（1996）では評価対象外であるが，千葉県では一部の地域で絶滅し，要保護生物に指定されている（黒住，2000）．松岡（1995）よれば，本種は豊富な酸素を含み，水質汚染が進行していない指標になるものの，日本各地で減少している．本調査域ではしばしば見られ，さらに上流域で多産することを確認している．

ハマグリ（図 1－22）
Meretrix lusoria (Röding)
マルスダレガイ科 VENERIDAE

本調査域ではハマグリ *Meretrix lusoria* (Röding)とシナハマグリ *Meretrix petechialis* Lamarck の雑種(混血)と考えられる個体が発見されている（川瀬，2002a，b）．したがって，ハマグリ(原種)の生息する可能性も残されているが，2000～05 年の調査では発見できなかった．

日本の従来のハマグリは，絶滅寸前であり（田中，1994；加藤・福田，1996），愛知県内では近年死殻すら採集できず，危険的生息状況であり絶滅した可能性も高いとされている（原田・木村，2002）．かつては内湾河口域の干潟から潮下帯に生息する貝類として最も顕著に姿を消した代表的な種であり，愛知県の評価区分は絶滅危惧ⅠA 類である．

田中（1994）によれば，本種は地域個体群として北限域の分布は既に消滅状態であり，減少種に評価区分されている．相模湾や千葉県では絶滅したことが報告されており（池田ほか，2001，黒住，2000），熊本県では天草の茂木根や有明海の数ヶ所で確認されるのみで絶滅危惧種に指定されている（熊本県希少野生動植物検討委員会，1998）．

オキシジミ（図 1－23）
Cyclina sinensis (Gmelin)
マルスダレガイ科 VENERIDAE

愛知県（原田・木村，2002），名古屋市（木村，2004）及び加藤・福田（1996）では評価対象外であるが，千葉県では要保護生物に指定されている（黒住，2000）．また，相模湾では消滅し（池田ほか，2001），愛知県では汐川干潟からも報告されているが（藤岡・木村，2000），本調査域では時々見られるにすぎない（川瀬，2002a）．今回の調査でも生息個体数は少なかった．

沖縄県文化環境部自然保護課（2005）によれば，沖縄県では絶滅危惧ⅠB 類に評価されている．

オオノガイ（図 1－24）
Mya (*Arenomya*) *arenaria oonogai* Makiyama
オオノガイ科 MYIDAE

愛知県内においては，オオノガイの生息場所である内湾奥部の泥干潟の環境が破壊されているので，本種の生息場所，生息数ともに減少したと考えられており，県の評価区分は準絶滅危惧種である（原田・木村，2002）．

矢作川河口域における川瀬(2002a)の調査報告では少数の生貝が確認されているが，その後の継続調査でも本種の個体数は非常に少ない．汐川干潟からも報告されている（藤岡・木村，2000）．

全国的に危険（絶滅に向けて進行しているとみなされる）種とされ，干潟の埋め立てや汚染によって産地が急速に減少している（加藤・福田，1996）．相模湾では消滅寸前である（池田ほか，2001）．

ソトオリガイ（図 1－25）
Laternula (*Exolaternula*) *marilina* (Reeve)
オキナガイ科 LATERNULIDAE

愛知県内においては，ソトオリガイの生息場所である内湾河口域や内湾奥部の泥干潟の環境が破壊されているので，本種の生息場所，生息数ともに減少したと考えられており，県の評価区分は準絶滅危惧種である（原田・木村，2002）．愛知県内では汐川干潟からも報告されている（藤岡・木村，2000）．また，2003～05 年に名古屋市

表1． 矢作川河口域における絶滅のおそれのある貝類および愛知県と日本全国の評価区分．

図版番号	和名	本調査域	愛知	全国
1－ 1	イボキサゴ	絶滅	絶滅危惧ⅠA類	危険
1－ 2	ヒロクチカノコ	絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅寸前(日本本土)
1－ 3	イシマキガイ	絶滅危惧種	リスト外	希少
1－ 4	タケノコカワニナ	絶滅	絶滅	絶滅寸前
1－ 5	カニモリガイ	絶滅	絶滅危惧ⅠA類	危険
1－ 6	フトヘナタリ	絶滅危惧種	準絶滅危惧種	危険
1－ 7	ヘナタリ	準絶滅危惧種	準絶滅危惧種	危険
1－ 8	カワアイ	絶滅	絶滅危惧ⅠB類	危険
1－ 9	ウミニナ	普通	準絶滅危惧種	危険
1－10	イボウミニナ	絶滅	絶滅危惧ⅠB類	絶滅寸前(日本本土)
1－11	ムシロガイ	絶滅	絶滅危惧ⅠA類	リスト外
1－12	ハイガイ	絶滅	絶滅	絶滅寸前
1－13	バカガイ	絶滅危惧種	リスト外	リスト外
1－14	クチバガイ	準絶滅危惧種	リスト外	普通
1－15	ユウシオガイ	準絶滅危惧種	準絶滅危惧種	危険
1－16	サクラガイ	絶滅危惧種	準絶滅危惧種	リスト外
1－17	サビシラトリ	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠB類	リスト外
1－18	オチバガイ	絶滅危惧種	絶滅危惧ⅠA類	危険
1－19	イソシジミ	絶滅危惧種	リスト外	リスト外
1－20	マテガイ	準絶滅危惧種	準絶滅危惧種	リスト外
1－21	ヤマトシジミ	普通	リスト外	リスト外
1－22	ハマグリ	絶滅	絶滅危惧ⅠA類	危険
1－23	オキシジミ	準絶滅危惧種	リスト外	リスト外
1－24	オオノガイ	絶滅危惧種	準絶滅危惧種	危険
1－25	ソトオリガイ	普通	準絶滅危惧種	危険

港区の藤前干潟の調査を行ったところ，本種の生貝を多数確認することができた．

本調査域においては個体数が多く（川瀬，2002a)，その後の継続調査でもまとまった個体数を発見することが出来た．

全国的に危険（絶滅に向けて進行しているとみなされる）種とされ，大都市近郊の汚染が進行した産地では減少している（加藤・福田，1996)．相模湾では消滅寸前である（池田ほか，2001)．千葉県では要保護生物に指定されている（黒住，2000)．沖縄県文化環境部自然保護課(2005）によれば，沖縄県では絶滅危惧ⅠB類に評価されている．

まとめ

最後に，選定した種の矢作川河口調査域での生息状況を，次のようなランクに分類して表1に記載した．また，比較しやすいように，それぞれの種について愛知県，全国の評価を記録した．

本調査域の評価については，絶滅(本調査域で絶滅したと考えられる種)，絶滅危惧種(絶滅の危機に瀕しているか，絶滅の危険が増大している種)，準絶滅危惧種(すぐに絶滅に向かう心配はないが，個体数が少ないか或いは確実に減少している種)，普通(個体数が多くレッドデータの範囲外と考えられる種)の４段階に区分した．

愛知県の評価については，愛知県環境部自然環境課

(2002) に基づき，絶滅(愛知県では既に絶滅したと考えられる種)，絶滅危惧ⅠA類(ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの)，絶滅危惧ⅠB類(ⅠA類ほどではないが，近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの)，絶滅危惧Ⅱ類(絶滅の危険が増大している種)，準絶滅危惧種(存続基盤が脆弱な種)の５段階に区分した．

日本全国の評価は，和田ほか (1996) に基づき，絶滅(野生状態ではどこにも見あたらなくなった種)，絶滅寸前(人為の影響の如何に関わらず，個体数が異常に減少し，放置すればやがて絶滅すると推定される種)，危険(絶滅に向けて進行していると見なされる種．今すぐ絶滅という危機に瀕するということはないが，現状では確実に絶滅の方向へ向かっていると判断されるもの)，希少(特に絶滅を危惧されることはないが，もともと個体数が非常に少ない種)，普通(個体数が多く普通に見られる種)の５段階に区分した．

また，愛知県と全国のリストに記載のない種は「リスト外」と記した．

表１のとおり選定された 25 種のうち 8 種類は，本調査域において絶滅したと考えられる．また，絶滅危惧種は 9 種，準絶滅危惧種は 5 種類であり，これらの 14 種類のうちバカガイ，クチバガイ，イソシジミ，オキシジミの 4 種は，愛知県及び全国の評価ではリスト外または普通にランクされている．したがってこれらの 4 種類の今後の個体数変動は，本地域の環境悪化の指標として注意すべきであろう．その一方で，本調査域で普通と評価された 3 種のうち，ウミニナとソトオリガイは愛知県や全国で準絶滅危惧種や危険にランクされている．これらの生息状況を維持するためにも，環境への人為的な負荷をなくし現状維持または改善に努めていきたいものである．

謝　辞

この報告をまとめるにあたり千葉県立中央博物館の黒住耐二氏には貴重な文献資料等を多数提供していただいた．この場を借りてお礼申し上げる．

引用文献

愛知県科学教育センター (1967) 愛知の動物．愛知県科学教育センター，名古屋市，pp. 223.

愛知県環境部自然環境課 (2002) 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいちー動物編ー．名古屋市，pp. 596.

藤岡エリ子・木村妙子 (2000) 三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相．豊橋市自然史博物館研究報告，No. 10：31-39.

福田　宏 (1996) 腹足綱．日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状：11-64, WWF Japan サイエンスレポート，3.

風呂田利夫 (2000) 内湾の貝類，絶滅と保全ー東京湾のウミニナ類衰退からの考察ー．月刊　海洋，号外 20：74-82.

波部忠重 (1998) ハイガイ．日本の希少な野生水生生物に関するデータブック：36-37, 日本水産資源保護協会．

原田一夫・木村昭一 (2002) (8)貝類．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいちー動物編ー：393-538, 愛知県環境部自然環境課，名古屋市．

肥後俊一・後藤芳央 (1993) 日本及び周辺地域産軟体動物総目録．エル貝類出版局，八尾市．

池田　等 (1994) 相模湾より消えゆく貝類．潮騒だより，5：6-7.

池田　等・倉持卓司・渡辺政美 (2001) 相模湾レッドデーターー貝類ー，104 pp. 葉山しおさい博物館．

加藤　真・福田　宏 (1996) 二枚貝綱．日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状：65-73, WWF Japan サイエンスレポート，3.

川瀬基弘 (2002a) 矢作川河口域における干潟の底生生物相．矢作川研究，6：81-98. 矢作川研究所，豊田市．

川瀬基弘 (2002b) ハマグリの歴史と文化．愛知文教大学地域文化センター叢刊，18：5-8.

川瀬基弘 (2004) 矢作川河口域のサンドポンプの貝．矢作川研究，8：277-291. 矢作川研究所，豊田市．

木村昭一 (2000) 伊勢湾・三河湾でドレッジにより採集された貝類(予報)．かきつばた，26，18-20.

木村昭一 (2001) 藤前干潟で採集されたワカウラツボ．かきつばた，27，14-16.

木村昭一 (2004) ⑧貝類．名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物，レッドデータブックなごや 2004ー動物編ー，263-292. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室，名古屋市．

木村昭一・木村妙子 (1999) 三河湾および伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相．日本ベントス学会誌，54：44-56.

熊本県希少野生動植物検討委員会 編著 (1998) 熊本県の保護上重要な野生動植物 レッドデータブックくまもと，381 pp. 熊本県環境生活部自然保護課．

黒住耐二 (1995) ウミニナ．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅱ)：73-78, 日本水産資源保護協会．

黒住耐二 (1998) 日本における絶滅の危機に瀕する海産貝類．海洋と生物，114：21-26.

黒住耐二 (2000) 貝類．千葉県の保護上重要な野生生物ー千葉県レッドデータブックー動物編：359-399, 千葉県環境部自然

保護課.
増田　修（1996）ヒロクチカノコガイ．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(III)：8-12, 日本水産資源保護協会.
増田　修（1998）ヒロクチカノコガイ．日本の希少な野生水生生物に関するデータブック：2-3, 日本水産資源保護協会.
松岡敬二（1995）III．潮干狩りにみる生きものたち．三河湾の生きものと自然, 51-67, 三河港海洋利用研究会.
松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高校増殖部・山口啓子・高安克己（1999）豊川下流域の貝類相．豊橋市自然史博物館研究報告，pp. 15-24.
名古屋市動植物実態調査検討会（2004a）名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物，レッドデータブックなごや 2004－動物編－．名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室，名古屋市，pp. 368.
名古屋市動植物実態調査検討会（2004b）名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物，レッドデータブックなごや 2004－植物編－．名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室，名古屋市，pp. 324.
日本水産資源保護協会（1995）日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅱ), 751 pp. 日本水産資源保護協会.
日本水産資源保護協会（1996）日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(III), 582 pp. 日本水産資源保護協会.
日本水産資源保護協会（1997）日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(IV), 590 pp. 日本水産資源保護協会.
日本水産資源保護協会（1998）日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅴ), 83 pp. 日本水産資源保護協会.
西脇三郎（1996）イシマキガイ．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(III)： 3-7, 日本水産資源保護協会.
沖縄県文化環境部自然保護課（2005）改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編，レッドデータおきなわ．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇市，pp. 561.
西條八束・八木明彦・梅村麻希・寺井久慈・川瀬基弘・松川康夫・佐々木克之（2004）中部空港島周辺における底質・底生動物を中心とした水域環境変化に関する研究．プロ・ナトゥーラ・ファンド第 13 期助成成果報告書：3-16.
水産庁（1998）日本の希少な野生水生生物に関するデータブック, 437 pp. 日本水産資源保護協会.
水産庁・日本水産資源保護協会（1994）日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅰ), 696 pp. 水産庁・日本水産資源保護協会.
田中邦三（1994）ハマグリ．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅰ)：69-78, 水産庁・日本水産資源保護協会.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五嶋聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏（1996）日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状．WWF Japan サイエンスレポート, 3, 182 pp.

愛知みずほ大学人間科学部人間環境情報学科：〒470-0394　愛知県豊田市平戸橋町波岩 86-1

図版説明

1．イボキサゴ *Umbonium*(*Suchium*)*moniliferum* (Lamarck)
ニシキウズ科 TROCHIDAE：×1.8
2．ヒロクチカノコ *Neritina*(*Dostia*)*violacea* (Gmelin)
アマオブネ科 NERITIDAE：×1.8
3．イシマキガイ *Clithon retropictus* (v. Martens)
アマオブネ科 NERITIDAE：×1.8
4．タケノコカワニナ *Stenomelania loebbeckei* (Brot)
トウガタカワニナ科 THIARIDAE：×1.1
5．カニモリガイ *Rhinoclavis*(*Proclava*)*kochi*(Philippi)
オニノツノガイ科 CERITHIIDAE：×1.4
6．フトヘナタリ *Cerithidea rhizophorarum* A. Adams
ウミニナ科 POTAMIDIDAE：×1.1
7．ヘナタリ *Cerithideopsilla cingulata* (Gmelin)
ウミニナ科 POTAMIDIDAE：×1.4
8．カワアイ *Cerithideopsilla djadjariensis* (K. Martin)
ウミニナ科 POTAMIDIDAE：×1.4
9．ウミニナ *Batillaria multiformis* (Lischke)
ウミニナ科 POTAMIDIDAE：×1.4
10．イボウミニナ *Batillaria zonalis* (Bruguiére)
ウミニナ科 POTAMIDIDAE：×1.1
11．ムシロガイ *Niotha livescens* (Philippi)
オリイレヨフバイ科 NASSARIIDAE：×1.8
12．ハイガイ *Tegillarca granosa* (Linnaeus)
フネガイ科 ARCIDAE：×0.9
13．バカガイ *Mactra*(*Mactra*)*chinensis* Philippi
バカガイ科 MACTRIDAE：×0.9
14．クチバガイ *Coecella chinensis* Deshayes
チドリマスホウ科 MESODESMATIDAE：×1.4
15．ユウシオガイ *Moerella rutila* (Dunker)
ニッコウガイ科 TELLINIDAE：×1.4
16．サクラガイ *Nitidotellina nitidula* (Dunker)
ニッコウガイ科 TELLINIDAE：×1.4
17．サビシラトリ *Macoma*(*Macoma*)*contabulata* (Deshayes)
ニッコウガイ科 TELLINIDAE：×0.9
18．オチバガイ *Psammotaea virescens* (Deshayes)
シオサザナミ科 PSAMMOBIIDAE：×1.4
19．イソシジミ *Nuttallia japonica* (Reeve)
シオサザナミ科 PSAMMOBIIDAE：×0.9
20．マテガイ *Solen*(*Solen*)*strictus* Gould
マテガイ科 SOLENIDAE：×0.7
21．ヤマトシジミ *Corbicula*(*Corbicula*)*japonica* Prime
シジミ科 CORBICULIDAE：×0.9
22．ハマグリ *Meretrix lusoria* (Röding)
マルスダレガイ科 VENERIDAE：×1.1
23．オキシジミ *Cyclina sinensis* (Gmelin)
マルスダレガイ科 VENERIDAE：×0.9
24．オオノガイ *Mya*(*Arenomya*)*arenaria oonogai* Makiyama
オオノガイ科 MYIDAE：×1.1
25．ソトオリガイ *Laternula*(*Exolaternula*)*marilina* (Reeve)
オキナガイ科 LATERNULIDAE：×1.1

図1　矢作川河口域における絶滅のおそれのある貝類.